

第49回鴨川義塾 講演 ゲスト 久保 忠一先生 2011年1月15日

タイトル「超高齢化社会と閉塞社会の現実に向き合おう」

レジュメ

余りにも重くて憂鬱な将来が待ち受ける。希望は無いのか？

絶望から希望への、いくつかの臨床でのイノベーションの経験則からそれをお話しさせていただきます。

だが、医学的に身体を治しただけでは人は幸せではなく、真の痛みはわからない。周囲との関係で、自分の存在が認められ、愛し合う土台がなくては、超高齢化社会は地獄であろう。結論から言って、高齢者が経験、技術、知恵などで付加価値を生み出す、お互いがお互いを必要とする社会の実現が理想で、受け入れる側の姿勢が大事である。そこに、老後の幸せがある。

一方、閉塞社会の原因は、昔は、それぞれの環境と能力に合った仕事があり、一生の設計が立てられたが、企業の国際競争が激化し、正規雇用の減少にもかかわらず、需要をはるかに上回る高等教育機関の設立が相次いだことが、構造的問題となっている。今の日本は「勝ち組」と言われる人だけが希望を持てる、不健全な社会になってしまった。日本の持つ精神的風土もマイナスに作用している。経済での落ち込みを海外の安い労働力や金融ギャンブルに頼るのではなく、新しい市場を求めなければならない。それは、世界に40億人以上もいる1日2ドル未満で生活する貧困層で、「彼らは犠牲者であり、重荷である」という先入観を捨て、「内に力を秘めた創造的な起業家であり、価値を重視する消費者である」と認識を改め、損得や契約ではなく、対等にお互いがお互いを必要とする社会を作らなければならない。そこには、考えもしなかった資源の使い方を発見するイノベーションもあり得る。